

ラテンアメリカ

随想

ラテンアメリカ映画事情

矢崎 久美

ラテンアメリカの社会や人々の暮らし、文化を、映画を通して日本人に伝えたいという思いから映画祭に関わるようになり8年が経った。この随想ではラテンアメリカ映画の最近の傾向や日本で見ることができるラテンアメリカ映画の一部を紹介したい。

上質作品が見られる映画祭

日本でラテンアメリカの映画に接する機会は残念ながら多くはないが、それでもラテンビート映画祭をはじめ東京国際映画祭、東京フィルメックス、埼玉県川口市主催のSKIP シティ国際Dシネマ映画祭などでラテンアメリカ映画は毎年のように上映されており、映画祭をきっかけに一般公開される作品もある。

2010年から私がライターとして関わっているラテンビート映画祭は昨年14回目を迎えた。スペインとラテンアメリカの新作映画を中心に選定され、コメディから社会派もの、ドキュメンタリーまでジャンルにとらわれない多種多様な作品を見ることができる。昨年の上映作品数は計14本で、新宿・大阪・横浜会場で開催された。上映回数が一律ではなく、ゲストの有無に動員が左右されるため単純比較はできないが、昨年の上映1回当たりの観客動員数をもっとも多かった作品はチリの詩人パブロ・ネルーダの逃亡劇を大胆に脚色した『ネルーダ 大いな

る愛の逃亡者』だった(表参照)。同作品は映画祭直後に日本公開が決まっていたにも拘わらず観客動員数が突出していた。ノーベル文学賞受賞の詩人ネルーダの数奇な運命はラテンアメリカ通以外にも知られており、また彼を追う刑事役がメキシコ出身のスター俳優ガエル・ガルシア・ベルナル、監督はラテンビート映画祭の常連パブロ・ララインということで期待度が高かったと思われる。幻想と現実が交錯するミステリアスな世界は多少展開が複雑ではあったが、見応えのあるアート作品に仕上がっていた。ほかにメキシコの国民的歌手チャベラ・バルガスのドキュメンタリー『チャベラ』も観客の満足度が高く、音楽ドキュメンタリー『ドス・オリエンタレス』上映後にはウルグアイ人と日本人の融合デュオ、ドス・オリエンタレスの二人と監督が登壇しミニライブも開くなど映画祭な

らではの盛り上がりを見せた。

注目度大のチリ映画

続いて、国別に映画人の活躍や作品の傾向、日本で見られる映画について紹介したい。最近、最も活気があると感じているのがチリである。ラテンアメリカでは比較的小国ではあるが、著名な映画人も輩出し、本年の米国アカデミー賞では日本で公開中の『ナチュラルウーマン』がチリ映画初の最優秀外国語映画賞を受賞した。この作品は前出の『ネルーダ 大いなる愛の逃亡者』のラライン監督がプロデューサーを務めている。ララインは米国で『ジャッキー/ファーストレディ 最後の使命』(2016年)を監督するなど、スペイン語圏を越えた活躍を見せている。

また約半世紀前に『エル・トポ』(1970年)、『ホーリーホーリー・マウンテン』(1973年)など前衛的な作品を手掛けて世界的映画作家となった鬼才アレハンドロ・ホドロフスキーは、80歳を過ぎてから故郷トコピジャを舞台に自伝的作品『リアリティのダンス』(2013年)、『エンドレス・ポエトリー』(2016年)を続けて監督するなど、制作意欲が衰えることなく精力的に活動している。

ハリウッドを席卷するメキシコ旋風

経済だけでなく文化においても隣の米国と深く関わりのあるメキ



2016年のラテンビート映画祭・新宿会場
(株)ティ・ジョイ提供

シコでは、メキシコ国内で評価された映画監督たちが数多く米国に進出し、破竹の勢いをみせている。

米国アカデミー賞では、2013年度にアルフォンソ・キュアロン（『ゼロ・グラビティ』）、2014、15年度にはアレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ（『バードマンあるいは（無知がもたらす予期せぬ奇跡）』、『レヴェナント：蘇えりし者』）が最優秀監督賞を受賞。そして本年は、ギレルモ・デル・トロ監督が『シェイプ・オブ・ウォーター』で最優秀監督賞と最優秀作品賞を受賞。他にも撮影監督のエマニュエル・ルベツキは2013年から3年連続で最優秀撮影賞受賞という快挙を成し遂げた。彼らはいずれも本国メキシコで撮った低予算作品を足掛かりに米国で成功を取めた。イニャリトゥ監督の『アモーレス・ペロス』、キュアロン監督の『天国の口、終りの楽園。』、デル・トロ監督の『クロノス』等、彼らの原点ともいえる初期のスペイン語作品は日本でもDVD化されている。俳優ではガエル・ガルシア・ベルナルと盟友ディエゴ・ルナの活躍が突出している。彼らは俳優だけでなく監

督・プロデューサーも数多く務めており、メキシコのみならずラテンアメリカ映画全体の牽引役となっている。またアカデミー賞で最優秀長編アニメ映画賞を受賞し日本でも公開中の『リメンバー・ミー』がメキシコの“死者の日”が題材になっていることも、メキシコの文化が深く米国に浸透している表れと言えるだろう。

メキシコ映画を語る上で切り離せないのが、米国との国境問題になる。イニャリトゥ監督は、アカデミー賞を初受賞した際、下記のようにスピーチした。

「米国で暮らす移民が、このすばらしい移民国家をつくった人々と同じように、尊厳とリスペクトを持って扱われることを強く祈っている。」

国境の壁や移民問題が今後どうなっていくのか大変気になるところだが、映画では『ノー・エスケープ自由への国境』、『闇の列車、光の旅』などで、ラテン系移民が直面している現実を知ることができる。

アルゼンチンの女性監督に期待

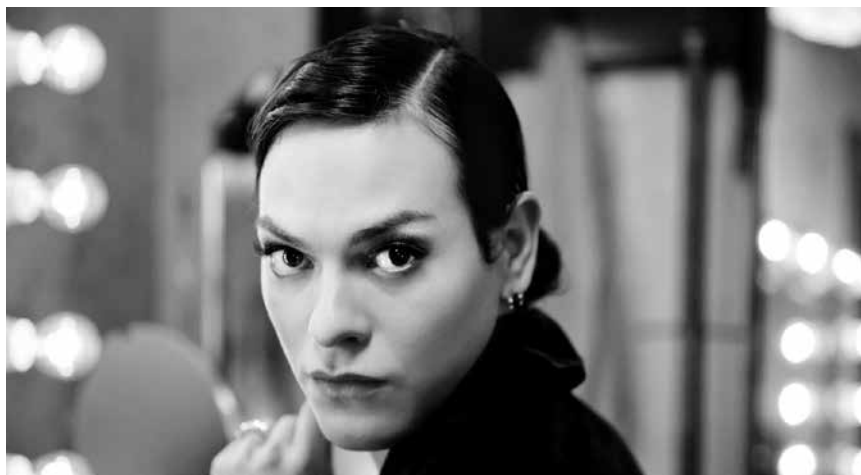
アルゼンチンの映画は、ここ数年『人生スイッチ』（2015年）、『エ

ル・クラン』（2016年）、『笑う故郷』（2017年）と、毎年のように日本で公開されている。アルゼンチン映画と言えば必ず名前が挙がるのが『人生スイッチ』にも出演していた名優リカルド・ダリン。そして監督は『エル・クラン』のバプロ・トラペロ。過去のラテンビート映画祭でもこの二人の作品は毎年のように上映されてきた。

最近の有望株ではサンティアゴ・ミトレ監督がいる。2012年に『Estudiante』がラテンビート映画祭で上映された際に来日。その後『パウリーナ』（2015年）、『サミット』（2017年）が同映画祭に出品された。アルゼンチンが抱える社会問題や政治腐敗等をストレートに糾弾する硬派な作風は、日本人には多少難解に感じるが、メッシとマラドーナだけではないアルゼンチン社会の現実に触れることができる。またアルゼンチンはお国柄なのか、女性の映画監督の活躍が目覚ましい。昨年のラテンビート映画祭で上映された『サマ』のルクレシア・マルテルはじめ、日本でDVD化されている『見知らぬ医師』のルシア・プエンソ、『偽りの人生』のアナ・ピターバーグなど世界で高評価されている女性監督が多いのも特徴だ。

ブラジル映画はドキュメンタリーに注目

2年ほど住んでいたことがあるブラジルの映画事情にも触れてみたい。ブラジルも日本と同じく大衆に人気があるのは米国発の娯楽作品や国産のコメディーだが、10月に開催される南米最大規模のサンパウロ国際映画祭では毎年400本近い映画が上映されている。普段見る機会の少ない外国映



『ナチュラルウーマン』 ©2017 ASESORIAS Y PRODUCCIONES FABULA LIMITADA; PARTICIPANT PANAMERICA, LCC; KOMPLIZEN FILM GMBH; SETEMBRO CINE, SLU; AND LELIO Y MAZA LIMITADA 配給：アルバトロス・フィルム

画や海外からのゲストに会うため毎日のように行列ができる盛況ぶりだ。映画祭で反響があった作品は世界の映画市場でも評価されやすく、例えば2017年に日本で公開された音楽映画『ストリート・オーケストラ』は同映画祭で観客賞を受賞している。また実在する精神科医の伝記映画『ニーゼと光のアトリエ』は、東京国際映画祭でグランプリを受賞し日本でも公開された。他にもブラジル社会を子供の視点で描いたアニメ『父を探して』や、10代の盲目の少年の成長をやさしい視点で捉えた青春映画『彼の見つめる先に』が日本で公開されている。この映画は2014年のSKIPシティ国際Dシネマ映画祭で脚本賞を受賞した作品で2月には監督も来日した。

世界市場に出回るブラジル映画は、有名人や偉人・大悪党など実在の人物の伝記映画が目立つのだが、ブラジルではドキュメンタリー作品も数多く作られている。サンパウロではアート系の映画館で常時ドキュメンタリーが上映されており日本よりも認知度は高いと感じた。日本で見られる映画は



『彼の見つめる先に』

限られるが、ブラジル出身のアーティストの活動を追った『ヴィック・ムニーズ ごみアートの奇跡』、『セバスチャン・サルガド 地球へのラブレター』は日本でも公開され好評だった。

多国籍映画、日本との合作も

最近では映画界も多国籍化が進んでいる。ラテンビート映画祭上映作品の多くが多国籍であり、特に『サマ』は製作に10カ国が関わっていた(表参照)。この作品は出演者もラテンアメリカのオールスターキャストだった。

また米国の動画配信大手Netflix製作の犯罪ドラマシリーズ『ナルコス』は米国製作ではあるが、舞台はコロンビア、スタッフ・キャストはラテンアメリカ映画界の重鎮が名を連ねており、日本では現在シリーズ3作目まで配信中だ。Netflixではほかにもラテンアメリカ作品が数多く配信されており『カメラが捉えたキューバ』等、

良質のドキュメンタリーなども見ることができる。

日本とラテンアメリカ諸国の合作映画も製作されるようになった。2017年に日本で公開された日本キューバ合作映画『エルネスト』は、ボリビアのゲリラ戦でチェゲバラと共に戦った日系ボリビア人フレディ前村の半生を描いた原作を基に、日本人の阪本順治監督がメガホンをとり、主演のオダギリジョーは全編スペイン語という難役に挑んだ。他にも製作・監督はブラジル人だが日本の俳優が数多く出演した『汚れた心』や、日本人の高橋慎一監督がキューバ人ミュージシャンに迫った音楽ドキュメンタリー『Cu-bop (キューバップ)』も公開されている。

また監督はキューバ人(カルロス・M・キンテラ)だが舞台は奈良、出演は日本人のみの『東の狼』も2月に日本公開された。同作は黒木和雄監督が1969年にキューバで撮影した『キューバの恋人』

表 ラテンビート映画祭(新宿)の上映1回当たり動員数上位作品(2015~17年)

年	順位	上映時邦題/原題	製作国
2015	1	エイゼンシュテイン・イン・グアナフアト/ Eisenstein in Guanajuato	蘭・メキシコ・フィンランド・ベルギー
	2	火の山のマリア/IXCANUL	グアテマラ・仏
	3	グラン・ノーチェ! 最高の大晦日/ Mi Gran Noche*	スペイン
	4	Closed Rooms/Habitaciones cerradas	スペイン
	5	Paco de Lucia: A Journey/Paco de Lucia: La Búsqueda	スペイン
2016	1	旅するギター〜パコ・デ・ルシアの面影を探して/ La guitarra vuela. Soñando a Paco de Lucia	スペイン
	2	名誉市民*/El Ciudadano ilustre	アルゼンチン・スペイン
	3	ジャクソン・ハイツ/In Jackson Heights	米国・フランス
	4	600マイルズ/600 Millas	メキシコ・米国
	5	彼方から/Desde Allá*	ベネズエラ・メキシコ
2017	1	ネルーダ 大いなる愛の逃亡者/NERUDA	チリ・アルゼンチン・仏・スペイン
	2	サミット/La cordillera	アルゼンチン・フランス・スペイン
	3	サマ/Zama	アルゼンチン・ブラジル・スペイン・仏・メキシコ・米国・蘭・ポルトガル・スイス・レバノン
	4	家族のように/Una especie de Familia	アルゼンチン・ブラジル・ポーランド・仏・デンマーク
	5	チャベラ/CHAVELA	米国・メキシコ・スペイン

※は2回上映のため1回当たりで計算 ※は日本公開時の邦題は『笑う故郷』

出所: (株) ティ・ジョイ提供資料より筆者作成

の後日談という設定になっているのもユニークだ。『キューバの恋人』の映像や、キューバの歌『Lo material』など要所所でキンテラ監督のこだわりが盛り込まれている。さらに、日本・チリ修好120周年記念合作映画『グリーングラス』の公開も控えるなど、今後の合作映画の動向は要チェックだ。合作映画を見ると、時折「ネイティブはこんな仕草や挨拶はしない」、「日本もしくはラテンアメリカの描き方がステレオタイプ」などの違和感を覚えることもあるが、ちょっとした細かな違いを知ることもまた、合作映画を見る楽しみの一つである。両国間のギャップを知り、それを埋めようとするのは相手への理解にもつながるはずだ。

ラテンアメリカと日本、どちらもよく知るラテンアメリカ通の読者の皆さんには、合作映画を見ていただき、その違いやギャップについても大いに語ってほしい。

終わりに

その他にも、ブラジル出身で米国で活躍するジョゼ・パジーリヤ監督や、チリ出身のドキュメンタリー作家パトリシオ・グスマン監督、メキシコの鬼才カルロス・レイガダス監督、ペルーのクラウディア・リョサ監督など、数多くのラテンアメリカ映画人・作品が世界市場で高く評価されている。またパナマのボクサー、ロベルト・デュランの半生を描いた『ハンズ・オブ・ストーン』、グアテマラ映画『火の山のマリア』など、中米の映画も日本でDVD化されている。邦画とアニメが劇場公開の中心となっている今の日本で、ラ



『東の狼』舞台挨拶（筆者撮影）

テンアメリカ映画はニッチな分野ではあるが、多様な文化を持つラテンアメリカ映画の面白さを、これからも地道に伝えていきたいと思っている。

（やざき ぐみ ラテンビート映画祭ライター、ラテンアメリカ協会事務局）



『東の狼』©nara International Film Festival



村の母と子